

昨年暮、宮内庁から平成31年1月16日(水)の歌会始の儀に陪聴者として出席するよう招請状が届いた。内封筒の宛名は「津和野森鷗外記念館長山崎一穎殿」と記名されていた。

私はかつて昭和55(1980)年1月10日、跡見学園女子大学学長として歌会始の陪聴に与った。昭和天皇、今上天皇と二度にわたる稀有な体験となる。

津和野町の森鷗外記念館は、平成7(1995)年4月に開館した。私は展示監修、運営協議会会長として関わり、平成24(2012)年1月、鷗外生誕150年を機に館長に就任し、今日に至っている。

この度の招請を憶測すれば、今年元号が代わることにあるうか。私の研究する森鷗外の文業の最後は、『帝諡考』(大10・3)「元号考」(未完)である。前者は天皇のおくり名(諡号)の出典考証であり、後者は、元号の出典考証である。

今年には新天皇の即位式が行われるが、



改元に思う

明治天皇の即位式は鷗外の生誕地・津和野藩(藩主亀井茲監)が執り行った。今上天皇の即位式も、宮内庁の職員が調査に来町している。

歌会の華は、節を付けて詠う独特な朗詠にある。今年の歌題は「光」である。歌の披露は講師が「年の初めに同じく光」ということを仰せごとに依って詠める歌」と言って始まる。講師が節を付けずにゆくりと詠み上げる。続いて4人の講頌が加わって節を付け、第二句以下を唱和していく。男性合唱である。

私は朗詠に加えて、新聞報道に現れない皇族方の名の呼び方に、典雅な響きがあると思っている。

報道記事では皇太子さまと記すが、最後に戴いて持ち帰る「歌会始御製御歌及詠進歌」では「東宮」と記され、歌会では「ひつぎのみこ(日嗣の御子)のうた」と講師が読み上げる。「東宮妃」は「ひつぎのみこのみめのうた」と詠み上げられ

る。この呼称を聞くと、平安朝以来の歌会の伝統と優雅さを感じる。天皇の「御製」は「おおぎみのみうた」と詠まれ、皇后さまは「皇后宮」と記し「きさいのみやのみうた」と詠まれる。平成最後の皇后さまのお歌は、「今しばし生きなむと思ふ寂光に園の薔薇のみな美しく」と、いつもながら秀歌である。

鷗外は、「名と質」の一致を理想として人生を歩んだ。元号は国家の名である。その出典は由緒正しくなければならぬ。鷗外は昭憲と英照の両皇太后にわが国に先例のない中国風の諡を付けたことを「軽率」であると述べる。それとともに明治天皇に真のおくり名を差し上げずに、元号（年号）を以て尊号としたことに疑義を呈している。元号は普通名詞として使われ、諡号と同一とするのは「不似合」であり礼を欠くと見る。

その元号も、「明治」は中国の「大理」という国の年号にあり、「大正」は安南の

山崎 一穎 ● 学校法人跡見学園理事長

「越」という国の年号にあり、いずれも元号制定の原則に外れている。「不調への至」という。政府や宮内省にいくら進言しても、故実の専門機関の設置の意志のないことを慨嘆している。

即位式は、津和野藩の国学者福羽美静が中国式に代えて、新時代に相応しい儀式を一部考案している。水戸藩主徳川斉昭が献上した直径1メートル余の地球儀を南庭に置き、天皇が正面の日本国を指して左右左と履^く先で三度触れる方式であった。日本を世界に拓く目的で考案された、即位のしるしであった。

この儀式が明治42（1909）年2月の登極令で廃止され、地球儀は式典の行われた京都御所に収納されている。以後、地球儀に代わって、天皇の即位宣言と首相の寿詞^{よこご}と万歳三唱となった。

明治の地球儀に、再度新しい使命を託して、新時代に相応しい即位式が執行されることを夢想しつつ、帰路に就いた。